2013年(平成25年)3月13日(12日発行)　日刊ゲンダイ

医者も知らない平穏死

連載㉒

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「『平穏死』10の条件」など。

俺が殺した――

私が「死」について考えるようになったのは、高校時代。父親が突然、自死したのです。そんなこともあって、医学生の時から死に関する勉強会に顔を出していました。

「安らかな死って何やろう、人間の尊厳って何やろう」と、20歳くらいから考えていました。医者になり、研修医時代は、新大阪にある〝野戦病院〟に配属。毎日のように搬送される終末期の患者さんの「延命」に、何も知らずに精を出していました。

勤務医10年目くらいのことです。ある出来事が起こりました。

当時、私はがんが全身に転移し、末期状態の患者さんを受け持っていました。その方は、私の抗がん剤治療の副作用で、グッタリされていました。ある夜、その患者さんから深刻な相談を受けました。

「今受けている抗がん剤治療をやめて、家に帰りたい。先生、往診してくれますか?」

患者さんの意向を上司に伝えましたが、抗がん剤治療の継続と、自宅への往診はできないと指示されました。ばかな私は、「抗がん剤治療は、まだやめない方がいいです。また、残念ですが、病院から自宅に往診することはできません」と患者さんに伝え、そのまま帰宅してしまいました。

しかし深夜、病院から電話が鳴りました。その患者さんが病院の屋上から飛び降りた、と。そしてその未明、患者さんのご遺体を私たちの手で解剖することに……。

「俺が殺した患者さんを、俺は解剖するのか」

あの時のなんともいえない後悔と無力感は、今でもはっきり覚えています。阪神大震災に見舞われたのはその直後でした。そうしたことが重なり、私は病院を辞めました。そして往診もできる開業医になりました。

延命治療とは、平穏死とは……。そのことを考える時、治療に絶望し、自ら命を絶つしかないところまで追い込んでしまった、あの患者さんの顔が必ず浮かびます。

(写真はイメージ)